

クアラルンプール日本人学校、シンガポール日本人学校チャンギ校及び中学部、 バンコク日本人学校における特別支援教育の実情と教育相談支援

小澤 至賢

(教育相談部)

I はじめに

当研究所では、在外日本人学校等の支援事業として、日本人学校や保護者からの要請で教育相談活動を実施している。また、この2年間、科学研究費による研究「外国在留邦人に対する特別支援教育に関する相談支援体制の構築」においては、海外で生活している法人で障害のある子どもを育てている保護者や本人、あるいは教育機関関係者を対象として、これらの相談に関するニーズについて、内容や希望事項、必要とされている情報を調査し、国内及び海外の主だった機関とのネットワークを形成することを目的に研究を推進している。

これまで日本人学校84校に対し、障害児の在籍、相談の有無、特別支援教育への取り組み等アンケートを実施し、特別支援教育に取り組んでいる、あるいは取り組みを検討していると回答のあった学校18校に現地調査を行った。今年度も引き続き現地調査を行い、その一部を報告する。

II 学校訪問

1 クアラルンプール日本人学校

(1) 学校概要

クアラルンプール日本人学校は、校長と2名の派遣教員と14名の児童で、当初日本人小学校として、1966年(昭和41年)11月22日に開校された。また、1970年には幼稚部が設置され、さらに1971年には中学部が開設された。

現在のスパン校舎へ移転から13年目となり、この間日馬両国政府、クアラルンプール日本人会、在馬日系諸企業の全面的な支援をうけ、特色ある教育活動を展開してきた。平成18年度は、幼稚部が112名(6学級)、小学部が特別支援学級を含め633名(22学級)、中学部が163名(6学級)の総計908名、教職員88名である。

首都クアラルンプールの郊外に17エーカー(約7万㎡)の校地を確保しており、世界の日本人学校の中でも屈指の恵まれた施設を有している。

(2) 学校経営方針および教育目標、教育課程等

①教育方針や特徴など

学校教育目標実現のため、平成17年度はCommunication能力の向上、Carrir教育の充実、Circle活動の拡大の「3Cプラン」を推進してきた。これらの取組を継続しながら、平成18年度は①授業改善と学力の充実②健康な身体と豊かな心の育成③国際理解教育の充実の3点を指導の重点として、教育活動を推進している。

②学校教育目標

「たくましいからだ、ゆたかな心、優れた知性と国際性を備えた児童・生徒の育成」を掲げている。

③教育課程など

クアラルンプール日本人学校では、以下の特徴的な取り組みを行っている。

小学部5・6年生では、算数、国語以外はすべて専門の先生による授業とし、音楽は全学年で音楽専科が担当するなど専門性を生かした授業により、子ども達の興味関心をより引き出すよう取り組んでいる。

・特色あるカリキュラムや多様な体験学習

日本の幼稚園教育要領、学習指導要領の内容を基に、小学校1年生からのネイティブの教員による英会話学習、英語で行う水泳の指導(イメージンスイミング)などの特色ある活動を加えたカリキュラムを編成し、実施している。また、国際理解教育として現地校との定期的な交流の他、希望者によるマレーシアの家庭へのホームステイ(カンポンホームステイ)など現地の自然・人・文化とふれ合う機会を数多く設けている。中学部では在馬日系諸企業、現地企業の協力を得て、進路学習の一環として1学年での「職場見学」、2学年での「職場体験活動」を行っている。

・児童・生徒の課外活動の支援

スクールバスによる家庭と学校の往復だけが毎日という生活とならないように、子どもたちの健全な成長のためには学習以外の共同の活動、相互交流の場が必要と考え、中学部の希望者を対象にサークル活動を設け、教員が生徒の自主的な活動を支援している。現在運動系6、文化系2の

サークルが週に1・2回放課後に活動しており、本年度から参加対象を小学部5・6年生まで拡大した。

国際交流では、小学部1年生から、中学部3年生まで、現地の学校との国際交流を、全学年、年に2回ずつ行い、1学期は、現地の相手校の友だちを招待し、2学期には相手校へ訪問している。

墓地清掃年に3回、クアラルンプールにある日本人墓地の清掃を行っている。

(3) 特別支援教育の状況について

なかよし学級(「特別支援学級」)に2名の教員を配置し、授業に取り組んでいる。授業内容は、主に知的障害養護学校の教育課程を参考にしながら、取り組んでいる。

「指導上配慮を要する児童についての検討会」において、全校教職員に対してプレゼンテーションするなど、なかよし学級の児童への理解を進める取り組みをしており、交流教育の充実を図っている。

通常学級にいる生徒に対する取り出し指導にも取り組んでいる。

(4) 学校訪問における教育相談

なかよし学級の保護者からの教育相談を行い、児童の育ちに関する内容や学校と家庭との連携に関する内容などの相談を受けた。

2 シンガポール日本人学校チャンギ校

(1) 学校概要

シンガポール日本人学校チャンギ校は、1995年(平成7年)に校舎が落成して開校し、1998年(平成10年)4月にシンガポール日本人学校三体制のひとつとして確立した。面積44,100㎡の広大な敷地である。本年度は、全校児童数932名がおり、日本人教師42名、外国人教師26名のスタッフがいます。

(2) 学校経営方針および教育目標、教育課程等

①教育方針や特徴など

日本の公立学校の教育課程に準じつつ、シンガポールの特色を生かした教育活動を展開している。

②学校教育目標

「自分で考え、判断し、実行できる心豊かな子どもの育成。」を掲げている。

③教育課程など

シンガポール日本人学校チャンギ校では、以下の特徴的な取り組みを行っている。

朝の15分間読書週4日間、全校一斉の読書タイムで学校が始まる。また、PTA図書ボランティアによる「読み聞かせ」「紙芝居」も活発に行っており、子どもが本を読むように取り組んでいる。

英語教育では、開校以来、15名の外国人教師による週4時間の英会話授業を行っており、重点課題として様々な試行をしており、習熟度別で授業をしている。

日本語教師の指導で1年生から4年生まで週1時間、英語の文字と音の規則的な関係を「読み書き指導」と絡ませる指導法であるフォニックスの授業を実施している。また、基本構文の指導を通して、英会話で学んだことの理解を深めることを目的として、5.6年生が隔週に1時間の学習をしている。

イマージョン教育では、英語そのものを学ぶことが目的ではなく、英語を手段として1年生～6年生までの水泳の授業と音楽の授業をイマージョンで行っている。

校外学習では、小学校の子どもたちは具体的体験を通して物事を考えることが大切です。本校では各教科、総合的な学習などあらゆる教育活動の中で体験活動を重視した教育機会を多く取り入れるように心がけている。現地校との交流では、各学年が現地校との交流を行い、共に過ごす中で、お互いを理解しあうことにより異文化理解に努めている。

ホームステイでは、本校と現地校の5年生の子たちがお互いに1泊2日のホームステイをしあっており、ここ数年は十数名が参加している。

(3) 特別支援教育の状況について

シンガポール日本人学校チャンギ校は、平成16年・17年度文部科学省海外子女教育研究協力校として、「特別な支援を必要とする児童に対する教育の推進～ハートフル教育部の実践～」のテーマで研究に取り組んでいる。

校務分掌上に特別支援教育が位置づけられ、ハートフル教育部として、「チャレンジ」「グローイング」の2本柱を中心とした支援体制となっている。

「チャレンジ」では、通常学級での学習が困難な児童に対する特別な支援を行い、「グローイング」では、通常学級の学習において特別な支援を必要とする児童(グローイングA)と日本語の理解がきわめて不十分な児童(グローイングB)に対する教育を行っている。

「グローイングA」では、学級担任と連携しながら、在籍学級での授業の支援の他、取出しによる教科指導の実践を行っており、「個別の教育支援計画」を作成し、個別の目標に対して、支援の見直しを定期的に行い、よりよい変容が見られるように丁寧に指導に当たっている。

「グローイングB」では、日本語指導を中心にしながら、

算数や国語の教科支援の充実を図るため、児童の興味を大事にしながら、漢字指導や音読における教材の工夫をするなどプロジェクトワークの実践に取り組んでいる。

「チャレンジ」では、4名の教員を配置し、授業に取り組んでいる。授業内容は、主に知的障害養護学校の教育課程を参考にしながら、取り組んでいる。

個々の児童が豊かな学校生活を送ることができるよう、学校全体の理解を深めることにも取り組んでいる。

3 シンガポール日本人学校中学部

(1) 学校概要

シンガポール日本人学校中学部は、生徒数460名、39名の現地採用教師も含め39名のスタッフで取り組んでいる。

(2) 学校経営方針および教育目標、教育課程等

①教育方針

「子どもへの勇気づけ」や「よりよい人間関係」を築いていくために、「美しい学校づくり」「喜びのある授業」「さわやかな挨拶」を3本の柱に立て、それぞれの子どもへの学校での教育、家庭での教育、そして地域での教育を絡めて行くことで、よりよい学校づくりができると考え、取り組んでいる。

②学校教育目標

「人に優しさ、自分に強さ」を教育目標に掲げ、取り組

んでいる。

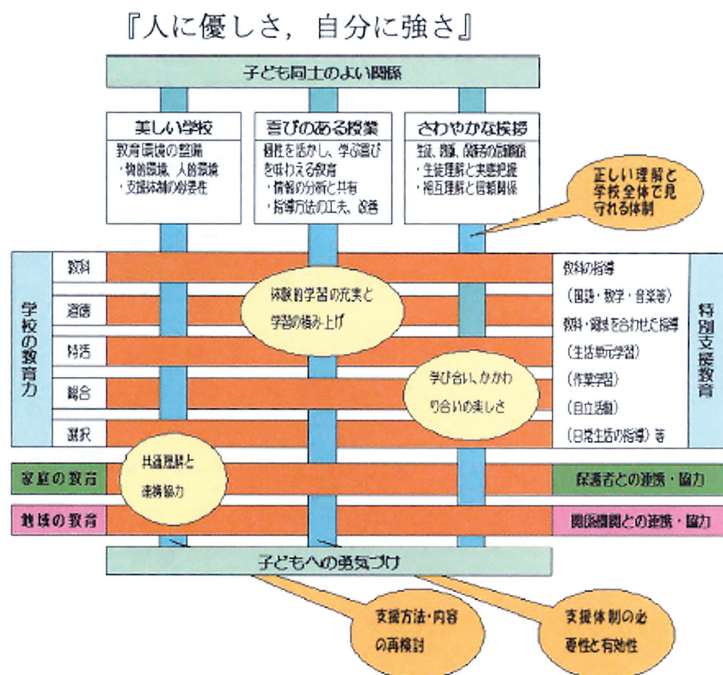
③教育課程など

シンガポール日本人学校中学部では、以下の特徴的な取り組みを行っている。

シンガポール日本人学校中学部では、現在、全ての生徒が在籍学級に籍を置き、生徒の障害や疾病等の状況により、通級して指導を受けたり、必要に応じて教師が学級に出向いて行って指導を行ったりしている。生徒の実態によって特別な教育的支援が必要な時間も異なるが、一日のほとんどの時間に必要なケースもある。

障害のある生徒への学習の場として、通級指導教室（チャレンジルーム）を設けている。自閉症や知的障害、肢体不自由等の障害を併せもつ生徒が対象で、一般の教育課程では、学習することが困難なため、チャレンジルームで特別な教育課程を組んで指導を行っている。このチャレンジルームは、養護学校等の学習指導要領に沿って学習を行っている。また、概ね中学校の学習指導要領に沿って学習ができるが、特別な教育的支援も受けながら学習する必要のある生徒を対象にしたワンズ・ステップコースを設けて取り組んでいる。

ワンズ・ステップコースでは、授業の進め方など一斉指導の中でフォローできることを支援Ⅰ、TTで特別な配慮を必要とする場合を支援Ⅱ、個別指導を行う場合を支援Ⅲとし、支援を三段階に分けて取り組んでいる。



【図1】本校教育目標と特別支援教育とのかかわり

(3) 特別支援教育の状況について

シンガポール日本人学校中学部では、20数年前から障害のある生徒への取り組みを選任の教師を配置して行ってきたが、平成17・18年度海外子女教育研究協力校の指定を受け、「在外教育施設における特別に配慮を要する生徒への適切な教育的支援の在り方について」をテーマに取り組まれた。

特殊教育で目指す3つの柱「体験的な学習の充実と学習の積み上げ（生活力の向上）」「学びあい、かかわり合いの楽しさ（コミュニケーション力の向上）」「共通理解と連携・協力（教師・保護者・地域のネットワーク）」の達成を目指している。

特別支援教育への取り組みを通して、それを必要とする生徒の教育を充実させるだけでなく、学校として、地域社会としてお互いに気持ちよく生活できるためにはどうしたらよいかをお互いに考えていくことも目指している。（図1 本校教育目標と特別支援教育とのかかわり）

具体的な取り組みとしてチャレンジルームでの作業学習の授業と「うつくしい学校づくり」と連動させたことで、校内の緑化が推進され、生徒同士のかかわりも一層広がっている。

特別支援教育にかかる教職員研修を実施し、高い評価を得ている。「生徒理解」と「現地理解」の柱で教職員研修プログラムを実施し、特に「生徒理解」の取り組みでは、学年会議をベースとした「支援チームミーティング」実施するなど生徒の気になることや問題となる点について情報を出し合うなどの取り組みを行っており、成果をあげている。

4 バンコク日本人学校

(1) 学校概要

バンコク日本人学校は、1926年（大正15年）創立の盤谷日本尋常小学校（1927年（昭和2年）からは盤谷日本国民学校に改称）を前身とする、日本人学校の中で最も長い歴史を誇る。

1946年（昭和21年）、第2次世界大戦の終戦に伴い盤谷日本国民学校は閉鎖されたが、バンコクに在住されている日本人の方々の日本語による教育を望む熱意により、1956年（昭和31年）1月22日にバンコク都内サラデーンの日本大使館の中に『在タイ日本国大使館附属日本語講習会』という名称で新しく開校された。創立時は、幼稚園児も含めて28名、教職員は4名だった。

昭和47年にバンコク日本人学校と改称し、日本やタイ国の経済発展に伴い、日系企業の進出に合わせて児童生徒の増加が続き、在籍数が500名を超えた。

バンコク日本人学校は、世界の85都市にある日本人学

校の中で最も歴史が古く、最も規模の大きい。

平成18年度は新小学1年生に311名の新入学生と219名の編入学生を迎え、内部進学する161名の中学1年も加え、全校児童生徒2,288名でのスタートした。

(2) 学校経営方針および教育目標、教育課程等

①教育方針

広い心で

明るく 仲良く たくましく

を校訓にして、「安心して通える・通わせられる学校」そして「確かな学力と国際性を身に付けさせてくれる学校」を目指して、全教職員一丸となって学校経営に取り組んでいる。

②学校教育目標

- ・思いやりのある子（徳育、国際性）
 - ・創造性を発揮し、積極的に学ぶ子（知育）
 - ・身体の健康をつくる子（健康）
 - ・国際性豊かな子（国際理解）
- を学校教育目標として取り組んでいる。

③教育課程など

バンコク日本人学校では、以下の特徴的な取り組みを行っている。

平成15年度からは、小学部1年生から5年生まで週1時間国語特別指導「ことば」の時間を新設し、児童・生徒の国語力の更なる向上に取り組んでいる。

平成18年度は、第2小学部棟、第2グラウンドを加えて一層充実した施設設備のもと、「安心して通える、通わせられる学校」「豊かな学力と国際性を身につけさせてくれる学校」を目指し、安全面への一層の配慮をすとともに、「人間尊重と共生」、「コミュニケーション能力の育成」、「異文化理解」、「自己表現力」をキーワードに教育活動を進めている。

キャリア教育の視点に立って、保護者の協力をいただきながら職場訪問学習、国際協力銀行（J B I C）の協力で、国際協力の現地学習にも取り組んでいる。

(3) 特別支援教育の状況について

1996年度（平成8年度）には、特別支援教育学級（「なかよし学級」）を設置、さらに漸増傾向にある重国籍の子どもたちの日本語能力充実のために、放課後週1回小学部1・2年生を対象とした「日本語補習」を開始した。

特殊学級（なかよし学級）があり、5名が在籍し、通級指導には5名が通っている。授業環境においても視覚的な支援など工夫がされている。

タイ国日本人会が中心となって、ボランティアが積極的に学校の教育活動への手伝いをしており、学習環境の向上や授業の円滑な展開を支援している。なかよし学級では、生活単元学習を「なかよしタイム」として、調理や工作、縫製などを行っている。その際に、保護者が「なかよしボランティア」として参加している。在籍・通級児童生徒の図画工作、家庭科など実技教科においても、「なかよしボランティア」が授業の支援をしている。また、タイで発達に何らかの問題を抱える子どもを育てている日本人家族のための相互互助サークルである「グループOZ」では、保護者向けの研修会などが企画されたり、メンバー全員が集まるミーティングを定期的に行い、情報交換するなど親同士が助け合ったりするような活動が活発にされており、リソースの限られている海外での生活に大きく寄与している。

Ⅲ おわりに

今回の訪問では、クアラルンプール日本人学校、シンガポール日本人学校チャンギ校及び中学部、バンコク日本人学校を訪問させていただいた。どの学校も校内の体制を工夫しながら取り組んでおり、指導内容の充実に努めていた。

今回訪問させていただいた学校では、現地のリソースを活用しにくい状況があることから校内での工夫がされている。特殊学級の担当者をはじめ、特別支援教育を校内全体の教員に浸透させる機運が高まってきており、体制作りも進んでいる。障害のある子どもたちを受け入れる状況が進んできているが、多忙さゆえ情報交換が十分でないなど、マンパワーを生かすための校内の支援体制をさらに工夫していく必要があると感じた。

また、親の会などが積極的に取り組まれている地域では、保護者同士の支援の輪が広がりつつあり、海外においては、このような支援機能の必要性を強く感じた。

今後、日本人学校の求めに応じて、校内の体制作りや授業研究等の指導内容、方法への示唆など、コンサルテーションなどで本研究所が関与していくことの必要があると感じた。

謝辞：今回の訪問において、クアラルンプール日本人学校では、小松茂校長をはじめとする皆様、シンガポール日本人学校チャンギ校では、森田真校長をはじめとする皆様、シンガポール日本人学校中学部では、小田修校長をはじめとする皆様、バンコク日本人学校では、國島健二校長をはじめとする皆様には、たいへんお世話になりました。記して感謝申し上げます。